みらい

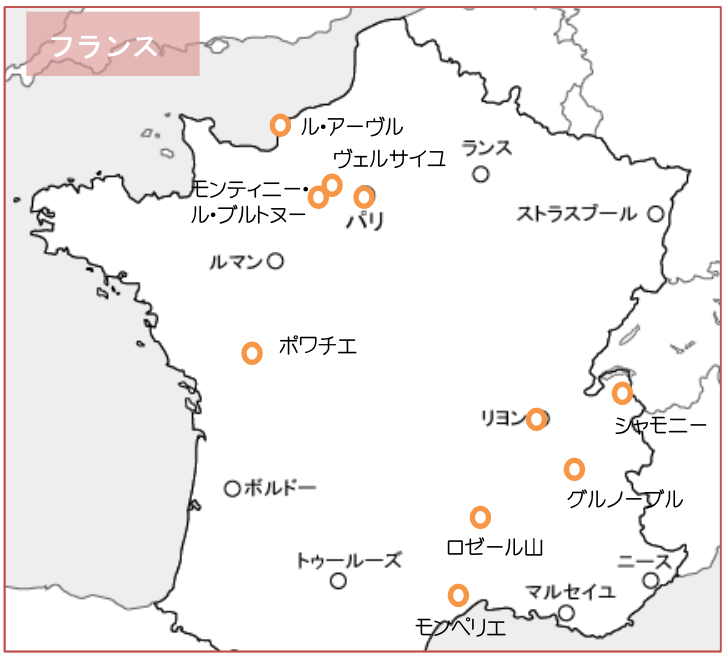
国際復興壁新聞

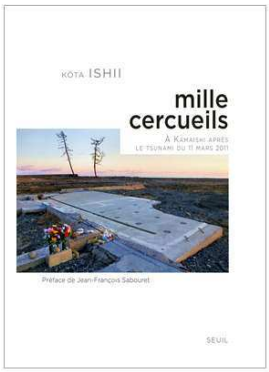
翻訳団編

翻訳団とは

東日本大震災後の釜石市を舞台とした石井光太さんのルポルタージュ『遺体ー震災、津波の果てに』（新潮社刊）をフランス語に翻訳しよう、と2011年12月に集まった、18 人の翻訳家有志からなる「翻訳団」。異なる町や国に暮らす私たちですが、思いを一つにして力を合わせ、今年の 3 月についにフランス語版『Mille cercueils（千の棺）』が出版されることになりました。

今回の国際復興壁新聞は、翻訳団のメンバーから釜石の皆さんへ Bonjour!（ボンジュール＝こんにちは）





今回文章を書いていただいた方々のほか、ル・アーヴルのレミさん、シャモニーのハクノ・タマオさん、フランクフルト・アム・マイン（ドイツ）のクレール・スタルテルさん、日本からは名古屋のエメリヤノフ・理恵さんらが、翻訳プロジェクトに参加しました。

ロゼール山から参加のアンヌさんは、フランスのソイユ出版社の方で、『遺体』のフランス語訳出版にあたり、編集を担当していただきました。

吉原孝子（フランス/モンティニー・ル・ブルトヌー）

こんにちは！翻訳団員、吉原です！
私の住んでいる町は、モンティニー・ル・ブルトヌーというところで、パリ市内から、南西に約 20 キロの場所にあります。日本の方々には、パリ日本人学校がある町として知られているかもしれません。
緑がたくさんあって、大きな公園があちこちに造られた新しい町ですが、昔は小さな村が点在する沼地だったそうです。現在は人口 3 万人を超えて、ドイツ、イギリス、ブラジルなどの町と姉妹都市となっています。

写真は、私の朝の散歩コースの池にいる鳥：ガチョウの赤ちゃんはあっという間に大きくなりました。白鳥や鴨もいます。この公園では、ジョギング、自転車をはじめ、乗馬、ウィンドサーフィン、ゴルフ、空中散歩など、いろいろなスポーツが楽しめるんです。

パリ方面に移動すると…。かの有名なベルサイユ宮殿が見えてきます。ベルサイユは古い歴史を誇る城下町で、お城やその庭はもちろん、古い街並みも一見の価値ありです。私が特に気に入っているのは、水曜日と土曜日のマルシェ≪市場≫で、色とりどりの野菜や果物、チーズ、お花などがとってもきれいに所狭しと並べられています。

フィリップ・リュティ（スイス/ヌーシャテル）

私は **「未来」** というものにずっと惹かれてきた。もちろん、未来が必ずしもいいことばかりだと思っているわけではない。明日には希望があっても、絶対に苦しみもあって、明日という日が約束されたものであるかどうかも定かではない。とはいえ、昨日がひどい日だったとしても、未来のためにできる様々なすばらしいことを目の前にすれば、惹かれることは人類として当然だと思う。

この未来への情熱が私を「翻訳団」と『遺体』に導いた。自分で翻訳した作品、自分の未来への情熱を知ってもらいたかったし、明日のために過去の悲しい日々を書き残す任務もあると思ったのだ。

我々の想像力を用いれば、今日よりもっといい未来ができあがると強く信じている。それが私が文藝翻訳者になった主な理由である。より良い将来の日本を描いた日本の SF 小説は私がもっとも興味のあるジャンルのひとつである。そしてフランス語の読者に、現実の中でも想像の中でも、最も壊滅的な状況にあっても前を向いて明日を考える日本、もっと良い世界をつくりあげようとする日本の勇気や力を伝えたいのである。実話であってもフィクションであってもそれは同じだと思う。

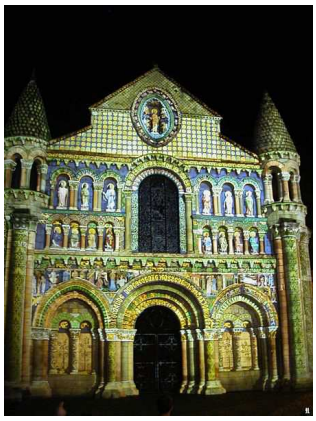
未来が私を魅了する。昨日の悲しい日々の記憶が頭に残っていても、希望をもって今日を精一杯生きていれば、希望の光を見ることができると強く信じている。

みんなの力で、今日という粘土で明日を作ろう！

二ツ橋光紗（みさ）（フランス/ポワティエ）

私がフランス語を勉強した「中世の町」、ポワティエを紹介します。ポワティエはフランスの西部にあり、人口は約9万人。なんと10世紀から12世紀にかけてフランスの首都でした。その当時の建物が今でもたくさん残っています。

ノートルダム・ラ・グランド教会



11 世紀に造られたロマネスク様式のこの教会の外側はたくさんの彫刻が彫られてあり、中はフレスコ画でカラフルに彩られている。夏の夜には色彩を交えてライトアップされる。この教会内で行われるコンサートもとても神秘的だ。

←サン・ピエール・ド・ポワティエ大聖堂

ゴシック様式のこの大聖堂は、12世紀に造り始められた。ファサードは細かい彫刻で飾られ、中はステンドグラスが美しい。

ポワティエの市役所→

19世紀に建てられた市役所は新ルネッサンス様式。

←ブロサック公園

18世紀に造られたフランス式庭園。中には鳥や山羊などがいる小さな動物園もある。

ポワティエは山羊のチーズが名物だメ～。

フチュロスコープ→

未来をテーマにした映像のテーマパーク。4Dの映画もあり、近代的で有名な所。

エマニュエル・ボナヴィタ（インド／ニューデリー）

世界が大きな碁盤となれたら

私の名前はエマニュエルです。日仏翻訳・執筆の仕事をしているのですが、妻の仕事のためインドの首都デリーに住むことになりました。それまで住んだ国はフランス・日本・イギリスでしたが、インドはかなりの衝撃でした。デリーに着いて理不尽と思っていた行列での割り込みやクラクションの鳴りっぱなしなどが、こちらで当たり前になっていました。新鮮なところはありましたが、落ち着かない雰囲気はどちらかというと私に合いませんでした。幸い家にいると混沌から離れることができましたので、家での空間だけを大事にしていました。ところがある日、この穏やかな空間が途絶えてしまいました。ビルを保有している大家さんが上のアパートを改装するので1か月半ほど工事が行われる、と言ってきました。しかしインドタイムは恐ろしいものです。1か月半のはずだった工事が4か月弱続いたのです。せっかく混沌から離れる唯一の場所が混沌となってしまいました。家は僕の職場でもありますので迷惑極まりない。

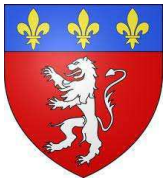
音のうるささから解放されたく、たまに友達の家や喫茶店にパソコンを持っていき仕事をしたりしたのですが、家でガンガンという音を聞いて混沌に負けそうになったとき、ふと「世の中はバランスが取れることってあるのか？」と思いました。そうしたら私の趣味である囲碁を思い出しました。囲碁はルールから解釈すれば陣取りゲームですが、ただのマインドゲームより、私にとってはバランスや分け合いという意味合いの方が強いです。碁打ちは交互に石を碁盤に置いて相手より広い陣地を確保するために一生懸命最善手を考えていますが、碁盤を全部自分のものにすると自滅しますし、狭いところだけを囲えば陣地が足りなくて負けてしまいます。自分の陣地が相手より半目だけ多ければ勝ちとなりますので相手よりほんのちょっとだけ多い陣地で充分です。

混沌を追い払うために囲碁にさらに夢中になったのですが、私はインド生活が不満というわけでなく、バランスが欲しかっただけということに気が付きました。工事の音に負けないように碁盤の前でバランス感覚を味わおうとしていたとき、陸前高田にボランティア活動をしに行ったことを突然思い出しました。現地で出会ったボランティアや住民の方々の会話が頭に蘇れば蘇るほど、1つの共通点を見出しました。言葉や話の内容が違っても、みんなが口にした希望や気持ちとは、別の言い方をすれば“バランス”だと感じ取ったのです。

考えてみれば 2008 年の経済危機や第二次世界大戦の原因は偏りから起こってしまいました。東日本大震災の際に起こった原発問題も、人間の欲張りやエネルギー業界の政治的な馴れ合いなど、つまり偏りによるものです。人間が理性を持っていても感性や物理的な物への愛着の部分をすべて排除できません。他の人とのバランスを重視すれば取り分を平等に分けられますが、そういう風に行動してくれる人はむしろ少数派です。そのため全世界に格差が生じてしまうのです。

碁盤では、孤立している一個だけの石は弱くてすぐに取られてしまいますが、石がきちんとつながれば、全体の石が強くなって相手がなかなか取ることができません。今それを実感した私は、東北の人たちがこれから明るい未来を迎えられることを祈りながら、世界が大きな碁盤になってバランスが取れるように、周りの石を見てちゃんとつないでいきたいと思います。

岩下曜子（フランス/リヨン）



リヨン　～絹の町から～

釜石市のみなさま、こんにちは。今日は、私が暮らす街、リヨンのご紹介をさせていただきます。ここは永井荷風が『フランス物語』に描いた街でもあります。ローマ帝国の植民市であったルグデゥナムは、古代から物資が集まり、人々の集積地として栄えてきました。リヨンにある二つの川、ソーヌ川とローヌ川に挟まれたプレスキルという土地に、人々が定住し始めます。ここには中世から多くの市場が立ち、人々が商売をし、貨幣経済の土台を築いたのです。

現在、ユネスコ世界遺産に指定された旧市街は、イタリアのルネッサンスの面影を強く残しています。当時、ここにはイタリアから高い技術を持った絹織物の職人たちがやって来て、リヨンの絹産業を支えていたのです。洗練され、人々を魅了した絹織物は、ヴェルサイユ宮殿などへ献上されて行きました。今日でも、リヨンには数々の歴史的な価値ある建造物が残され、古都とされるだけではなく、人々の現在の生活の中に再生され続けているのです。

クロワルースと呼ばれる丘は、「カヌー（絹職人）の丘」とも呼ばれています。絹織物をつくる職人たちのアトリエがあったので、こうした愛称がつけられているのです。私がリヨンでお会いした職人さんから、当時のお写真をお借りしました。絹糸を紡ぎ、縦糸と横糸を組み合わせ、一枚の絹織物となるように、人々の輪を繋いで行くことができればと願っております。

坂井香織（フランス/パリ、ベルサイユ）「坂井さんの日常」

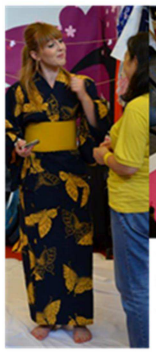
ジャパンエキスポ

皆さんご存知ですか？簡単に言うとフランス中のオタクが集まる一年に一度ある大イベントです。

今年は、ファイナルファンタジーX、XIII、XIV のプロデューサーさんたちが。(^-^)

有野課長！イェーマリオカートに挑戦らしいプレイでした

といったオタクイベント以外にも、実は日本の文化を紹介するといった面もあります。書道、浴衣の着付け、折り紙など。



「フランス人って胸とくびれがあるから浴衣着せる時しわが出来やすくて大変なんだよねー」、らしい…いいな。

書道なんて小学校の時以来。緊張で手が震える。今のうちに練習を…

ヤバい、最近漢字書いてないからいきなり難しいの頼まれたらどうしよう…幽霊、ちょっとやばかった。

確か、日本人の奥さんから折り紙を習ったっていってたような…

仕事場はベルサイユ

フランスは農業大国なんで、農学研究所ってもんがあります。

パリから電車で40分、駅から10分、国立研究所（INRA - Institut National de la Recherche Agronomique-）に向かいます。

研究対象 *Arabidopsis thaliana*、シロイヌナズナです。

白衣はまだ着ないよ。今は考え中。

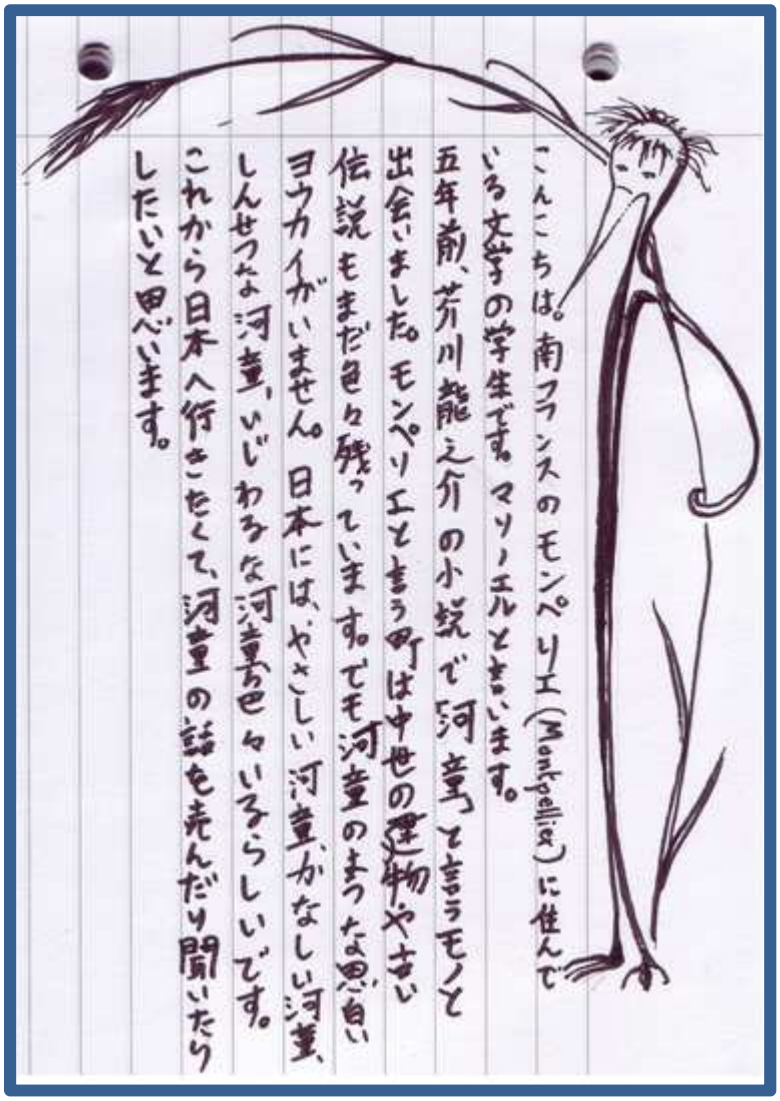
天気がいい日はたまに運河のほとりでお昼ご飯。

食堂でサンドイッチ、ピザを注文し、INRAから歩いて10分。なんと目と鼻の先にはベルサイユ宮殿が。宮殿とその庭園には運河があるのでここからは入れません。残念。

そして夕方飲みにいくと…。

「最近若者の間でマヌーシュ・ジャズがはやってる」と、同僚が。このバー・レストランでは週一でミニライブがあるらしい。

飯食ったら昼寝、昼寝っと。天気もいいし。ちゃんとその後は仕事しますよ。



こんにちは。南フランスのモンペリエ（Montpellier）に住んでいる文学の学生です。マリノエルと言います。
五年前、芥川龍之介の小説で河童と言うモノと出会いました。モンペリエと言う町は中世の建物や古い伝説もまだまだ残っています。でも河童のような思い出ヨウカイがいません。日本には、やさしい河童、かなしい河童、しんせつな河童、いじわるな河童などいろいろらしいです。
これから日本へ行きたくて、河童の話を読んだり聞いたりしたいと思います。

マリノエル（フランス/モンペリエ）

日本に住んでいた二年間は自分の未来に大影響がありました。コミュニティを大事にすることも自然や季節を関心することも日本滞在の教えでした。

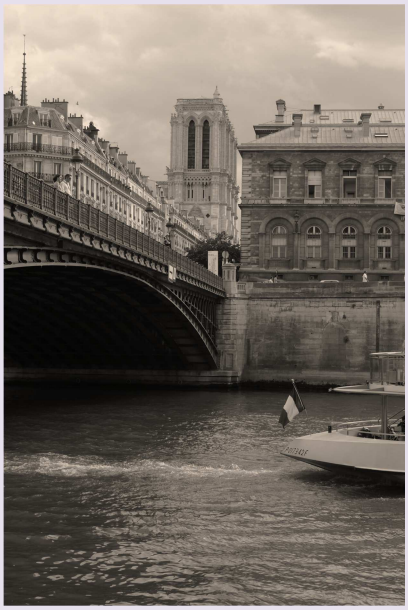
帰国してから自分の未来を考えて自然に役立ち、町の人たちと対応する手仕事したくなりました。最近自転車修理の免許を取って、アルプス地方で自転車屋さんになるような準備をしてます。

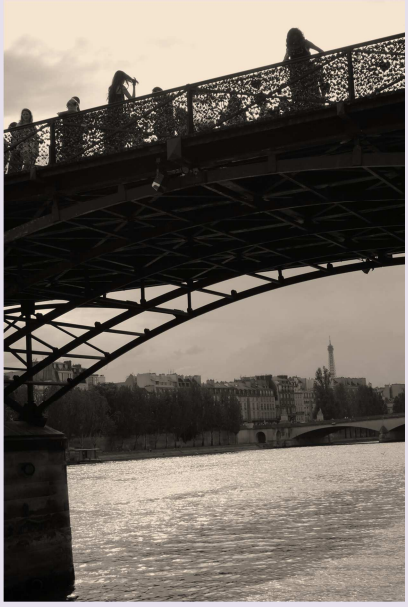
自分の自転車を最初から作ることができるなら、日本の雰囲気、山水、平和な空気を自転車のデザインに映したいです。

また近いうちに日本の友達と再会し、一緒に日本の素晴らしい自然で気軽に遊びに行けるように祈っています。

マルゴー（フランス/グルノーブル）

セーヌ川のほとりで捉えたパリの夏





ドゥニ（フランス/パリ）

アンヌ（フランス/ロゼール山）

今日の午後、茶色の仔馬が生まれた。悪天候のこの日、私の外出を見計らってこっそり誕生したのだ。私が山小屋に戻ると、仔馬は牧草地の下の方で、今にも折れそうな足をがくがくさせて、立ち上がろうとしている。母馬はもちろん、年老いた茶色の雌馬も、孕んだ白馬も、その様子をすぐ近くで辛抱強く見守っている。牡馬と前の年に生まれた仔馬たちは少し遠くにおり、あまり近づきすぎると鼻で押し返される。こうして二時間近く、馬たちの群れが仔馬を囲み、仔馬の足並みにあわせて牧草地を上がってくる。三歩登ったと思うと足を滑らせ、転倒。一休みしてまた挑戦。一頭たりとも離れはしない。坂の途中の、鷹が止まる一本松のあたりから、牧草地の最上部はまだ遠い。何枚か写真を撮りに下りてみた。夜になる前に、馬たちが山小屋に近づいてくれればよいのだが。

悪天候により散策ができないので、知り合いを訪ねることにした。最初は老人ホームで暮らす 88 歳のフェリックス。仲間とブロットと言うカードゲームの最中で、私に構わず続けているので、しばらくその成り行きを追った。元気そうで、友人たち（「みんな」）と楽しくやっているようだ。いろいろな人々の近況を聞かれた。山小屋への帰り道、マラヴィエイユのおばあちゃんのところに立ち寄った。彼女の息子から、転倒のせいで片腕はギプス、片足は「痛むんだよ」と聞いていた。相変わらず耳が遠いのだが、元気いっぱい。小柄でかわいい顔をした 92 歳のおばあちゃん。この二人に会えてよかった。

昨日、一昨日は夏日だった。エニシダの花が黄金に咲き乱れ、森は風にざわめき、山の頂には人気もない。たった一人で長いこと歩くうち、始めは不明瞭で雑全としていた想いや夢が、少しずつ明確となり、翼を広げてゆく。歩き疲れながらも、すばらしい散策だった。その後、日本語の勉強を一時間。飽くことのない、聴いていて（思い出の中でも、心の中でも）耳に心地良い言葉、たくさんの漢字、果てしなく湧く疑問。刺繍に打ち込めば、夢想に、彩りに、そして細やかな手の動きに我を忘れ、疲れた体も回復する。心の内と外、暗闇と生とを行ったり来たりできる扉として、読書は欠かせない。実に月並みなことばかりだが、釜石の皆さん、他の皆さんが、そんな日々を過ごせるよう願っている。

2013 年 7 月 3 日　ロゼール山にて（翻訳：町田ももみ）

エッフェル塔。同じパリ市内におりながら、普段は目にすることもありませんが、地下鉄の高架線の窓に突然ちらっと現れたり、中華街の丘からずっと遠くに見えたりすると、なぜか心が弾みます。そして夜の蒼い闇の中、毎時丁度からシャンパンの泡のように、チカチカと輝き出す５分間。その姿はどことなく一生懸命さが感じられ、このかわいらしい光景が見られた日には、ちょっと得をした気分です。なんだかんだ言っても、パリの象徴なのですね。

「みらい」に参加してくださった翻訳団のみなさん、ありがとうございました。

町田ももみ（フランス/パリ）